

Q 小学校と中学校を滑らかにつなぐために、どのように連携を進めていけばいいのですか。

A 子どもが小学校から中学校へと、新しい環境に移行するときの心理的・文化的環境の変化から、いじめや不登校・暴力行為の増加などの問題が指摘されています。そこで、そのことを克服し、小学校と中学校を円滑に接続するため、小中一貫教育を進めている学校や自治体があります。義務教育9年間の教科等の系統性を生かして学力向上を目指したり、異年齢交流を進めて人間性・社会性を育成したり、さらに、地域全体で育てたい児童生徒像を掲げ教育目標を共有したりして、効果をあげている地域もあります。

では、小学校、中学校が連携を進めるには、どのようなことから始めていけばよいのでしょうか。これまでも6年生の中学校体験入学や部活動体験、中学生が小学校行事を手伝うなど、交流を行っている学校は少なくありません。小学生が中学校での生活や中学校の教員等をよく知ることのできる環境を整えることが、進学への不安を取り除くことにつながります。

これらの「交流」の取組を「連携」へと進めていくために、段階を踏んで取り組んだ小学校、中学校の例を紹介します。この例では、小・中の教員が互いの校種を理解することから始め(第1期)、次に小・中教員の考え方等の違いを埋めたり、解消したりしながら連携した組織をつくり(第2期)、そして、小・中の子どもの生活実態調査から教育目標の共有へと進めてきた(第3期)ものです。

- ・第1期 小・中の教職員が互いを知り、理解するために小・中教員の懇親会を実施、次いで、スポーツ交流会、そして、小・中連携を話し合う「推進委員会」を設置、さらに、「学習」「生徒指導」「生徒・児童会」「人権・特別支援」の4部会に全教職員が分かれて参加し、研修を進める。
- ・第2期 小・中の職員室の座席表を教員の顔写真入りで作成、交換配布  
生活実態アンケート(小・中共通項目)を小・中で実施  
全国学力学習状況調査の情報共有  
地域行事に小・中が一緒に参加  
学校だより、学年・学級通信等の供覧  
小・中の教員が互いに授業を参観できる機会(授業参観、研究授業)をつくる。
- ・第3期 上記のアンケートを基に小・中の共通課題を抽出し、ともに目指す方向を探り、学校教育目標や指導内容・方法に反映させる。  
職員研修を小・中合同で行う。各代表による先進地視察及び伝達講習  
小・中及び地域が目指す子ども像を共有する。

6・3制の9年間の中で、小学校から中学校への入学時に集中してハードルが現れます。具体的に何がハードルになっているかを明らかにするとともに、この段差を滑らかにするための必要な手立てを小・中の教員ができることを見つけて進めていくことが必要です。また、下のように、小・中それぞれがもつ良さを取り入れることも小学校と中学校を滑らかにつなぐことに効果があります。

- ・小学校での子どもの活動を重視した授業の進め方を中学校に取り入れる。
- ・中学校の組織的な生徒指導の手法や教科担任制の一部を小学校高学年に取り入れる。

子どもは、義務教育の期間を連続して学び、成長していきます。心身の成長が大きいといわれる10歳から14歳頃の期間を同じ教員が通して見ることはできませんが、小・中の教員が上手にバトンをつなげるような仕組みをつくりたいものです。

校種

小学校・中学校